さざなみノイエ

室内と園庭がつながる多様な起伏をつくり
0歳から自分で探索できる環境をつくる

保育環境づくりのポイント

0-2歳が集う施設の園庭環境において、立ち上がる前の子どもたちは、“抱っこ”での移動が多くなる状況がある。室内と園庭環境をつないでいる既存ウッドデッキを観察し、流れを妨げている要因を見つけ、さらに細かな段差や傾斜をつくってひろがり・つながり・ながれを生みだし、ずり這いやハイハイでも行動範囲が広がっていくような環境をつくる。

～こどもたちのこの力を育みたい～

☑感じる・気付く力　☑うごく力　☑考える力
☑やりぬく力　☑人とかかわる力

取組み内容

1.　観察とディスカッション

0歳の子どもたちも移動できるように
園庭にひろがり・つながり・ながれを生み出したい

子どもたちと園庭環境を観察・振り返り。
ウッドデッキと園庭（土）との繋がりをつくり
とくに小さな子どもたちも、自ら動き、探索したり、
他の子どもたちとの交流ができる環境を意図した。
デッキを直線的な移動（廊下的）ではなく
滞留して遊べる空間にすることから構想を始めた。

上：園庭全景
デッキに、室内と園庭をもっと繋げるひろがりをもたせたい。

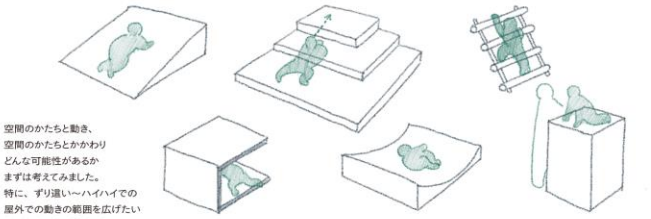
左：デッキに埋め込まれている既存の水場は、保育室と近く、またデッキ幅も十分にないなかで、子どもたちの移動や関わりの流れを止める要因にもなっていたので、移動する。

右：どうすれば、子どもたちが自分で移動して、環境を探索しやすいか議論している様子。

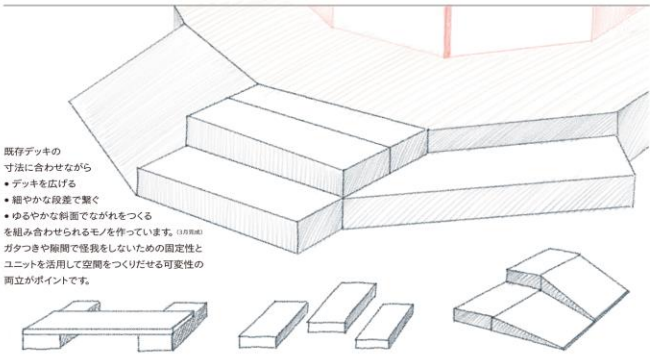
2.　デザインの検討：どんなかたちがあればよい？

移動可能なユニットで多様な空間要素をつくろう

子どもたちの動きをイメージしながら、
空間の形状のパターンを組み合わせながら設計を検討。
基礎からのデッキ拡張工事は難しいので
A: 流れを妨げている水場を移動し
B: 取り外しや移動ができて、小さな段差の
バリエーションを作り出すユニットをつくろう、
というアイデアに至る。
隙間ができて指を挟まないような固定の工夫も必要。
取り外して、間隔をあけて設置すれば
橋のようして遊ぶこともできます。



空間のかたちと動き、
空間のかたちとかかわり
どんな可能性があるか
まずは考えてみました。
特に、ずり這い～ハイハイでの
屋外での動きの範囲を広げたい
ということに気づきました。



既存デッキの
寸法に合わせながら
• デッキを広げる
• 細やかな段差で繋ぐ
• ゆるやかな斜面でながれをつくる
を組み合わせられるモノを作っています。（1月現在）
ガタつきや隙間で怪我をしないための固定性と
ユニットを活用して空間をつくりだせる可変性の
両立がポイントです。

3.　現在、完成を目指して、制作を進めています。

これまでの積み重ねから、自分たちの手で試行錯誤して
ちょうど良いものを作り出す楽しさを知りました。
職人さんの助けも借りながら、完成を目指しています。

＜今回の取組みを通して＞……今年度も、昨年度の取り組みから続き、目の前の子どもたちを観察する視点を深めることを、園庭づくりの柱とした。日常の中で、子どもたちの姿はたえず変化していく。登る、駆け下りる、高いところからジャンプする。懸命に取り組んでいる姿を解像度高くキャッチして、子どもが自発的に選び取れる環境を作っていくことを、今後も大切にしていきたい。